

小舟を岸に引き上げ、一切合財打ち棄てて、「それからは」イエシユーさまにつき従ったのでござった。

二五・腐れ病を治す

参照 マタイ 8 1-4、マルコ 1 40-45

12 さて、イエシユーさまがある町にござったときのこと、御覽あれ、そこに体中ひどい腐れ病を患^{わづら}っていた一人の男がござった。

① 腐れ病の身は町中に住むこともならず、人に近寄ることもならず、もしも人がそばに寄ってくれば、自らの口を覆って「この身は穢^{けが}れてござる！」と叫ばなければならぬ定めでござった。この男はイエシユーさまの噂を耳にし、何としても治^{なお}していただきたいものと、禁を犯して町に入り、決死の覚悟で物陰に人目を避け、待ち伏せてい

たものでござる。

この男はイエシユーさまを見るや、顔を地べたに擦りつけて、こう願つてござる。

「もし、旦那^{だんな}！ 其方様^{そなたさま}セア（さえ）その氣になりやらば、この俺^{おれ}をサツバ^{うづバ}と美しく治すによがす（治すことがおできです）！」^ケ

13 イエシユーさまは手を伸ばして、その男の肩をシツカリと掴んで、こう言いなさった。

「勿論^{もちろん}だ！ サツバ^{うづバ}と治れ！」^ケ

すると、その腐れ病の憑^{もの}き物が逃げ出して、病はたちまち奇麗サツパリと治つてしまつたのでござった。

14 イエシユーさまはこの人にしっかりと言いつけなさった。

「この事を誰^ども語^{かた}なよ。ただ、お前^{めア}さんが治つた証にするためだ。祭司さまの所へ行つて、モーセさまの決めやつたように、② 浄めのお供物を擗^めげなれ（擗^めげなされ）。」^ケ

15 とは言うものの、イエシューさまについての評判はますます広まって、イエシューさまの話を聞き申そう、病も診ていただこうと、人々が引きも切らず次々と集まって来続けたのでござった。

16 しかし、イエシューさまはしばらく荒野に引つこんで、ただひたすら神さまのお声に心の耳を澄ましていなさった。

二六・中氣の人を治す

参照 マタイ 9-18、マルコ 2-12

17 そんなある日のことだ。イエシューさまはいろいろと教えていなさったが、その場には「近くは」ガリラヤの村々と「遠く」ユダヤの村々と「はるばる」イエルサレムからやって来たファリサイ衆と掟語り衆も座っていたのでござった。イエシューさまは、御あるじなる神さまのお力をその身に授かり、さまざまの病を治してやつていなさった。

18 そうしていた折り、御覧あれ、そこに、何人か

の男たちが中気で体の動かなくなった病人を担ぎ板に寝せたまま運んで来て、どうにかしてその人をイエシューさまの前に置いてやろうと、苦勞しており申した。19 しかし、何ともかんと人前で、いかにしても運びこまれるような有り様ではなかったから、屋根に上がり、瓦をガラガラ引き剥がしたその間から、その病人を担ぎ板ごとイエシューさまの真前にソロソロと吊り下ろしたのでござる。

20 イエシューさまは、その人たちの、自分をこれほどまでも力頼りに思ってくれているその姿を見て、こう言いなさった。

「爺さん、

世間の衆が、お前さんがそんなな（そんな嫌な）病氣になったの、ア天罰が下つての事だと思っていべが（思っているだろうが）、実ア

お前さんにア既に罪などアねアどされでんだぞ（な）いとされているのだぞ」
「**ケ**」

ユダヤの都市にイエス様が行かれたときの出来事をお話ししましょう。

ある都市に、なんと、「癩（らい）」と呼ばれた恐ろしい伝染病に体中が覆（おお）われた人がいました。この伝染病は、体の皮膚を溶かして行く恐ろしいものだったのです。体中が爛（ただ）れたこの病人は、イエス様を見て土下座をし、祈り願ってこう言いました。「主よ！あなたであれば、お心のままに、私のこの腐った体をきれいに清くすることがおできになります！」それでイエス様は、その手を伸ばしてその病気の身体を触り、言いました。「私の心は、こうだ。さあ、きれいに清く、なりなさい。」途端に「癩（らい）」と呼ばれた病気はこの病人から離れて行きました。

イエス様は「誰にも、この事は言わないように」と、きれいに清くなったこの人に向かって、厳しく命じました。「ただ、きれいに清くなったことを、祭司たちに見せて、旧約聖書以来の宗教儀礼に従って、もう穢（けが）れていないことの証明をもらってきなさい。そうして、世間に戻るのですよ。」

このことをきっかけに、やはり、イエス様の噂は、いよいよ広く伝わって行きました。有象無象の人々は、こうして、いよいよ群がってくることになったのです。この人々はイエス様の言葉に触れ、そして、その病を癒されて行ったのでした。

それで、イエス様は荒野へ引き上げて行きました。祈るためでした。

イエス、癩者を癒される

(ルカ福音書五章一二—一六節)

私たちは、癩者がどのようにイエスの許にやって来て、彼の前にひざまずき、願いごとを述べたかを讀んだ。

「主よ、あなたがお望みなら、私を癩から淨めて下さることができます」。

若い娘たちのひとりが言った。——たとえこの男の人が、「あなたがお望みなら」と言ったとしても、彼はイエスさまが自分を治して下さることを確信していた、と私は思うわ。彼はイエスさまにご好意を求めてお願いしているんだけど、治して下さることを信じて疑わなかったのよ。

オスカー 僕が思うに、この病人がこのように「あなたがお望みなら」と言ったのは、彼が自分を取るに足らない人間だと感じていたからじゃないのかな。彼は自分を神から望まれている人間とは感じていなかった。彼は人々から蔑まれていた癩患者だった。だから彼は言ったんだ。「あなたがお望みなら、——そしてもし、あなたがお望みでなかったら、それもまた、よろしゅうございます」と

いうことなんだ。イエスの答は、「私は望む」だった。この男は謙虚で、イエスに迫りたいとは思わなかったんだ。僕たちキリスト教徒もこうでなければいけない。つまり、神から暴力で何かをねだりとうとうしてはならない。この男はその病氣ゆえに自分自身を卑下していた。彼は癩患者だったんだから、自分を神の子と感じていなかったんだ。

青年たちのうちの他のひとり。——彼がそんなふうに言ったのは、彼が他の誰よりも優れた人に向かっている、とすでに知っていたからだ。彼はその人の前で、自分を罪人のつみびとのように感じていた。その時彼は、自分の意志によるだけで、彼を癒すことができるイエスの神的な力を感じていたんだ。

女性たちのひとり。——この人は恐らく、神でさえ癒すことができないという、あらゆる場合のことを考えていたのではないのかしら。神のご意志で病んでいる多くの病人たちがいるわ。イエスさまだって、ほんとにすべての人を治されたわけではなくて、ほんの数人の人でしょう。

ペドロ・ラファエルが言った。——この病者がイエスに助けを求めた時には、すでに彼はイエスを信じていたんだ。彼は、不治の病を癒すことができるのは、イエスただひとりであることを知っていた。だから、彼の願いは信仰の行為だったんだ。

ウィリアム。彼はイエスが、あらゆる悪、病氣や死さえからも人々を解放してくれる、解放者だということを認識していた。癩患者は、当時は死者と同じで、町に行くこともできなかったし、他の人々とのすべての接触から遠ざかっていなければならなかったんだ。

女性たちの他のひとりオリヴィア。——ここに出て来る男の人は、イエスが、ただ望むだけで、

病気を癒えることを認めていた。この癩患者は、イエスが望むならば、イエスは病気を治すことができる。と認識していたのよ。もし彼が治らなかつたら、それはイエスがそう望まれなかつたことだと考えていたんです。

ナターリア 人間には、神さまが何をなさるかが、はっきりと解っているわけではないわね。そうでしょう？ 時々、神さまは私たちを病気になさるわ。なぜなのか、解らないけれど。

イエスが手をさしのべ、彼に触れて言った。「私がそうなることを望む」。イエスがそう言った時、病人は彼の癩から癒されていた。

オスカー 癩患者はイエスに強制したわけではない。彼はすべてを、彼の病気も健康もイエスの手に委ねた。そしてイエスは、彼が健康になり、癒えることを望まれたんだ。

フェリクス・マイヨルガ 僕たちはここで、彼に願っただけの人を癒すのを見た。もし、この癩患者が、彼の所に来なかつたら、イエスは彼を癒すことはなかつたらう。しかし、イエスは誰かが彼のもとにやって来た時、決して「私は望まない」と言わないことに注意していたんだ。イエスはいつも、そのように望まれた。だがイエスが予期していたのは……

私は言った。——こんな願いに彼が、「私は望まない」と答えたとしたら、イエスは間違われたことになる。

オリヴィア 神さまや聖人に、自分たちのお祈りで強制したいと思っているキリスト教徒がいるわ。彼らは神さまが聞き届けて下されば、自分たちがしたいと思うことをなんでも誓うわ。だけど、それは、まるで神さまを買いたがっているみたいですね。

私 癩者の言葉は、私たちがどのように祈るべきかということを示しているね。つまり、神は、それが正しいと思う時には、私たちを助けて下さるということだ。それが健康であろうと、病気であろうと、死であろうとだね。しかし、私たちは、自分自身に関係のないこと、神の御旨が顧慮なさることだけを祈ってもよいんだね。当時、癩は不治の病이었다。今日では、癩患者が治療を受けることができるような病院がある。ソレンチナーメの子供たちの病気も、今では、大抵、治療可能なんだ。私たちが自身の手で取り除くことができない悪だからと言って、それを神のご意志だとみなすのは、よくないね。

そしてイエスはその癩者に、誰にもこのことを話してはならないと命じた。しかしイエスは彼に仰せられた。「ただし、祭司のところへ行って自分を見せ、このきよめのために、モーセが命じた捧げものをしなさい。そうすれば、すべての人々が、あなたが癩からきよめられたことを知るだろう」。

トマス 僕は、この男がこの奇蹟のことをしゃべり散らしたりしないように言われたのは、恐ら

くこの男が、何か間違いを報告することもあるからだだと思つて居りますだ。だが、この病人は、すぐにこのことを話してしまいました。病人はきつと、自分の場合はとても興味深い例なんだから、すぐ、皆に話してやりたいと考えたことでしょうからなあ。

ドナルド それはしかし、もともと奇妙なことだ。一方でイエスは彼に、話しちゃあなんないと言つていらして、もう一方では、この男を神殿にやつて、浄めさせている。すると皆が、この男が健康だつてことを知つてしまいますことでしょうが。

エルビス 僕は、イエスは宣伝めいたことをしたくなかつたんだと思う。なぜなら、イエスは、彼に反対する階級があることを知つていたからだ。だから、どんな宣伝めいたことだつて、危険だつたんだ。他の人々がどう考えたか、僕には解らないけれど。

オリヴィア だけど、イエスさまは恐れはいなかつたわ。最後の最後には、彼らが自分を殺すだろうつてことは、ご存知だつたんだから。イエスさまは、ご自分の時が来るのを、知つていらしたのよ。以前、イエスさまは「私の時はまだ来ていない」とおっしゃったけど。だけど、イエスさまは実際、宣伝についてなんか、何もご存知ではなかつた。私たちが、私たちのことをあっちこちでしゃべられるのが好きでなかつたとしても、神さまのようなイエスさまのことをどれだけの人々がしゃべつたというの！ こんなことを拵めてはいけない、と言つたところで、それでも人々は黙つてはいないでしょう。だけど、病人が突然、健康になつたという事実だけで、居合わせた人が皆、奇蹟に会つたという結果になるわね。そんなことはいつても起こると私は思うの。つまり、真実だけ

が独力で自分の権利を主張する、と私は思うの。

私は言った。——ふたりの解釈は私には、同じように正しいと思われる。イエスは自分の使命を、上流階級の人々がそれをさまたげることなく、静かに実現するために、どんな宣伝もしたくないと思つた。あたり前のことだが、彼は名声や権力を欲する指導者ではなく、彼はただ自分の使命を果たしたかっただけなのだ。

ドン・フリオ・シャヴァリア イエスはただ、その癩患者に、誰が彼を癒したかをしゃべられなくなつただけで、癩者が癒されたということは、当然、すべての人が知ることができると考えたんだ。だから、イエスは彼を神殿に送つた。

ウィリアム 人々がもうこの男をのけ者にしないように、イエスはそうなつたんだ。癩や梅毒、その他の皮膚病は、当時、汚れたものと見なされていたからね。癩者は、人間社会から破門されたも同然だったんだ。彼はもはや、他の人々と往来してはならなかった。この癩患者はイエスに近づいたというだけで、すでに福音書が言っているように、ひとつの掟を破っているんだ。イエスは彼に、そのことを話してはならない、ただ健康の証明を要求して、再びこの男が人間社会に受け入れられるようにと言っているんだ。

アレファンドロ イエスは非常に人間的だったんだ。誰でも他の飢えている人を助ける能力のある者は、——僕はただ例として言うだけだよ。いいかい？——その人を助けるべきなんだ。しかし、革命家には、他の使命がある。革命家にとっては、二、三の病人を治したり、数人の人を助けること

ではなく、すべての人間をそうすることが大切なんだ。そうだろう？ だから、イエスは人々が彼らの主眼点をそんなささいなことに向けて、そのことについて語ることを望まなかったんだ。イエスがこの地上で行ったことは、もっと偉大なこと……

ラウレアノが彼を避けた。——チェ・ゲヴァラは医者だったんだが、医者としてのチェ・ゲヴァラがまさにその機会が生じたとき、シエラ・マエストラで病人を治療したとしてもか？

アレフアンドロが続けた。——イエスはただそうしなければならなかったから、彼の奇蹟を行ったんだ。だが、それは彼の真の使命ではなかった。彼が人々にどのような言おうと、彼はそれを欲しなかったんだ！ しかしながら、それが彼の真の使命でなかったからこそ、彼はこの男に、このことについて話してはならないと言ったんだ。イエスはこんな評判を望まなかったし、人々が奇蹟の医者として彼を取り違えることも望まなかった……

マヌエル 人々がイエスをマタガルパのもぐりの医者のように考えたとしたら、どんなによかっただろうな。彼奴の所にはバスにいったいの人間たちがやって来るんだからな。しかし、癩が不治のものとなされていたら、この治療もイエスの真の使命と関係があったんだらう。つまり人類をそのあらゆる醜い傷から癒すということなんだが。なぜって、彼を目のあたりに見ている人間たちってのは、満身創痍だったんだぜ。

フェリペ そうだ、僕は今、ほんとにはっきりと解った。イエスはこんな小さなことにかかわるために行らしたんじゃない、ということさ。僕たちのように。そうじゃないか？ 革命家たちのグルー

「僕は、ひとりの人間に、片手で一片のパンを与え、もう一方の手で他の人間にシャツを与えることはできるが、それは、僕たちがほんとうに望んでいることじゃないんだ。僕たちは国全体を解放したいんだ！ キリストもそうだったんだ——その片手間に、彼もこのようなことと関係した。これは僕たちにはよい教訓だ。」

私。——イエスは真の病氣、つまり利己主義^{エゴイズム}を癒すために行らしたんだ。もし、いつか人類が利己主義^{エゴイズム}から癒されたら、人類は他の病氣、癩からさえ解放されるだろうね。利己主義^{エゴイズム}のない社会には、よい医者も居るだろう。すべての人々のための医学的な看護も病院も、癩に対抗する手段もあるだろう。マナグアの癩病院は、これに反して——私はたった今、新聞で読んだばかりだが——外国の専門家が閉鎖した方がよいと警告を出し、患者を家へ送り帰したほうがよいと言うほどひどいものなんだ。ウィリアム イエスは宗教的な規則に価値をおいていたから、この男を神殿にやったのではないと僕は思う。彼自身が真の理由を説明している。「そうすれば、あなたが癩から淨められたことをすべての人が知るだろう」って。

トマス 彼が病氣だったから、人々は他の人間と彼と一緒にしておかなかったんでしょうが。治った今、イエスはこの人に、神殿に行けば、この人が健康なことを皆が知るだろうから、行けと言ったんでさあ。そうすれば、もう皆がこの男を嫌がったりはしなくなりますだ……

しかし、イエスの噂はますます拡がり、お言葉を聞いたり、病氣を癒してもらうために、多くの

民衆が集まった。

——見ててごらん。そうなると政府はもう不安になるんだ、とひとりの男が気づいて言った。

しかし、イエスは祈るために、孤独に引き籠もられた。

きょうは、エル・サルヴアドルからの亡命者が私たちの所を訪れていた。彼は大学教授で、軍隊が大学を占領した後に、彼の祖国を捨てた。彼は言った。——パリサイ人たちは、神の家である神殿を、彼らのビジネスを展開するために利用していた。きつとそれでキリストは神殿に行かず、寂しい場所に引き籠もられたんだ。今だって多くの人々が、目的からそれてしまった神殿のなかで祈るよりも、家で祈る方を好んでいる。

フェリペ 宗教で金をつくらうって連中は、今とまったく同じ……

トマス その人たちが神殿で商売をしていたとしたら、なぜ、イエスさまが神殿で祈られなかったかは、当然のことでしょう。それなら、イエスさまは山へお入りになる方がよろしかったろうて。山の中ではよくお祈りができますもんなあ。

ウィリアム 僕はこの物語の初めの箇所に関連して、もう少し言いたいんだけど、イエスが癩患者を癒すときに、彼がこの病人に触れたというのは、僕の意見では特筆すべきことだと思うんだ。そう

することによってイエスは、癩患者に触れてはならないというタブーを取り払われたんだ。イエスは彼に触れなくなつて、癒すことができたはずなんだけど、イエスは彼に触れた。そうすることによって、イエスが僕たちに教えているのは、僕たちが隣人たちと、とくに苦しんでいる人たちと接触を持つべきだということなんだ。そうすることによってイエスは、僕たちがどのように治療すべきであるか、ということも教えている。世の中には、ひとりの人間が苦しんでいたら、その人に手を置いてやるフェルナンド・シルヴァのような、誠実で親切な優れた医者もいる。そうして病人たちは、実際に治って行くんだ。ただ薬の力だけじゃない。それに反して、他の医師たちは人々から嘆かれている。「あの人は一度だって、俺に触れたことはない」って。それでいて医者たちは、おそらく処方箋を出しているんだろが、そこには愛情なんてものは何もないし、医者と患者の触れあいもない。

私は言った。——最初のキリスト者たちの共同体では、人々はこれを「病者に手を置く」と言ったんだね。ということは、彼らはイエスから、よく学んでいたんだ。後になると、これが純粹な儀式になつてしまふんだが、私たちがウィリアムのフェルナンド・シルヴァについての例で理解した通り、当時はこれが、イエスが弟子たちに遺贈した、真の治療法だったんだね。

フェリペ イエスが、この病人に手で触れたということは、非常に重要なことなんだ。今でも僕たちが結核患者に触れることを、とても嫌がつているように……まるでちょっと触れただけで、すぐ病気に感染するみたいに。

ペドロ もう一度、この祈りに戻ってみよう。キリストは、非常に多く祈る人だった。彼は神殿に

ついで語るときに、それを礼拝の場と言わずに、「祈りの家」と言っている。イエスは死の前に、ゲッセマネの園で祈っている。彼はまた、私たちも彼が御父とそうであったような接触を持つように、と私たちに教えているんだ。彼はまるで死と格闘するように、御父に祈っている。イエスは祈りの人だったんだ。

私は言った。——イエスはサマリヤ人の女性に、将来はもはや神殿などというものはなくなつて、人々は式祭文や儀式を用いずに、神と接触を持つことが（「霊と真理によつて」）できるだろう、と言つておいでになるんだね。真の神殿とは、神がそこに現存しておいでになるような共同体なんだ。だが、イエスは、神がどこか他にも見出され得るものであることをもお示し下さつた。つまり、孤独のうちにも神はおいでになるんだね。